

朱鷺の舞う里を
未来へ
受け継ぎたい



水田での江の設置



ふゆみずたんぼ



魚道の設置



ビオトープの設置



環境に配慮し育てられた米は、「朱鷺と暮らす郷」の名称でブランド化されています。

トキの餌となるドジョウなど多様な生きものが生息できる水田環境を整えるために「生きものを育む農法」に取り組んでいます。



世界農業遺産認定による効果

農林水産業

認証米のブランド力向上と販路拡大

- ・朱鷺と暮らす郷づくり認証制度のブランド力向上のため、要件の検討、PRイベントの実施、普及啓発活動を展開
- ・販路拡大のため、米穀専門店を中心とした営業活動のほか、佐渡産品を取扱う「サドメシラン」の普及拡大活動を展開



- 朱鷺と暮らす郷認証農家数 : 256戸 (H20) → **384戸** (R3)
- 朱鷺と暮らす郷認証面積 : 426ha (H20) → **1,072ha** (R3)
- 農業法人等組織化数 : 28団体 (H23) → **53団体** (R3)
- 新規就農者数 : 14名 (H24) → **延べ161名** (R3)
- 朱鷺と暮らす郷販売米穀専門店の店舗数 : 150店舗 (H23) → **280店舗** (R3)
- サドメシラン店舗数 : 18店舗 (H26) → **121店舗** (R3)

観光

『トキと共生する里山』を巡る交流人口の増加

- ・国内で初めて世界農業遺産に認定された島の農業システムを確認に訪れる交流人口の拡大に向け、PRイベントの実施、ツアーの造成、ブランドマークの開発、田んぼアートの実施
- ・島で幅広く活動する「地域おこし協力隊」の多くが、任期を終えた後も島に残って暮らしている



▲田んぼアートの実施

- 世界農業遺産の認知度(島内): - (H25) → **70.7%** (R3)
- トキの森公園来場数 (H23から累計) : 3,107,367人 (H23) → **4,541,702人** (R3)
- 佐渡棚田協議会の会員数 : 17人 (H24) → **83人** (R3)
- 佐渡市世界農業遺産ブランドマーク申請件数 (延べ) : - (H23) → **102件** (R3)
- 田んぼアートイベント (田植え・稲刈り) 参加人数 : - (H23) → **200人** (R3)
- 地域おこし協力隊採用人数 (延べ)、定着率 : 4人 (H24) → **48人** (R3) 定着率**62.5%** (R3)

次世代への継承

農文化で育まれた伝統芸能の継承

- ・国内の3分の1ともいわれる能舞台が現存し演能が行われるほか、五穀豊穡などを願いながら継承してきた伝統芸能が残っている



▲伝統芸能「鬼太鼓」

- 能舞台現存数 : 35棟 (H23) → **35棟** (R3)
- 鬼太鼓保存件数 : 約120件 (H23) → **約120件** (R3)

子どもたちへの環境教育、食育教育

- ・身近な田んぼや川など、見慣れた風景が守られてきた仕組みや取組みを学ぶ教育活動を推進するとともに、給食に地場産品を使った食育から農業を学ぶ取組みが進んでいる

- 環境教育(トキ)を取り入れている島内学校 : - (H23) → **13校** (R3)
- 佐渡Kids生きもの調査隊の隊員数 : - (H23) → **50人** (R3)
- 島内小中学校給食における認証米使用率(米粉含む) : - (H23) → **100%** (R3)

生物多様性の推進

生物多様性を支える仕組みや取組み

- ・トキと人が共生できる里山環境を保全・再生するため、トキをシンボルとした多くの生きものが棲む安全・安心な農法を追求



▲年に2回実施する「生きもの調査」

- ・生きものを育む農法、生きもの調査といった取組みが浸透し、トキのエサ場となる生物多様性豊かな田んぼが保たれ、野性下のトキ個体数が増加している

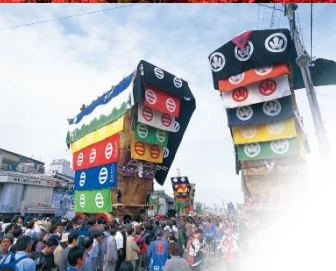
- 野生下のトキの個体数(推定) : 49羽 (H23) → **484羽** (R3)
- トキ環境整備指定寄附金額 (H23から累計) : 7,668千円 (H23) → **83,259千円** (R3)
- トキファンクラブ会員数 (H23年から累計) : 4,181名 (H23) → **8,769名** (R3)
- 生物多様性の認知度 : - (H23) → **81.7%** (R3)



春



夏



優れた里山景観

日本海に面した急傾斜地に広がる棚田や「間垣」と呼ばれる竹の垣根、茅葺きや白壁・黒瓦の家並みなどが広がっています。

伝えたい伝統的な技術

日本で能登に唯一残る「揚げ浜式」と呼ばれる製塩法や、「輪島塗」といった伝統工芸、「炭焼き」などの伝統的な技術が継承されています。



伝統的な農林漁法と土地利用

稲のはざ干し(天日干し)や海女漁などの伝統的な農林漁法が継承されています。また、干を超える「ため池」が点在し、傾斜地には多くの棚田が見られます。



里山里海の利用保全活動

棚田のオーナー制度や農家民宿、農林水産物のブランド化、行政と大学が連携した人材育成などが進められています。



文化・祭礼

ユネスコ無形文化遺産に登録された「あえのこと」をはじめ、農林水産業と結び付いた文化・祭礼が伝承されています。

多様な生物資源

希少種を含むたくさんの生きものが生息・生育しています。また、「能登野菜」などの在来品種の栽培の振興がはかられています。



冬



秋

世界農業遺産
「能登の里山里海」
それは
能登の暮らしそのもの。



世界農業遺産認定による効果

伝統的な農林水産業の継承

「能登の里山里海」の次世代への継承

- 地域内の高校生が、地域の農林水産業を支えてきた「地域の名人」を訪ね、その知恵や工夫、思いを聞き取りまとめる「聞き書き研修」を平成24年度から実施。高校生からは、「名人のように社会に貢献できるような人になりたい」、「地域に対する見方が変わった」などの意見が聞かれた。



活動報告書
が発行されて
います。

- 地域内の小学生(高学年)を対象に、身近な存在である「能登の里山里海」をより理解してもらうため、副読本教材を作成し・配布。(これまでに4,200冊配布)



副読本は、親
しみやすいよう
に漫画で描
かれています。

- 令和元年度からは、「聞き書き研修」をさらに発展させ、「能登の里山里海」の生業を高校生に体験してもらい、地域の魅力の再発見や定住のきっかけをつくる取組を実施。

- 石川県内の大学生を対象に、能登をフィールドワークの場所として、地域振興の実践例を学び、能登への理解を深める「いしかわ里山塾」を平成30年度から開催。参加した大学生は、自らの経験を活かして小学生に対して出前授業を実施。

- 高校生対象プログラム(聞き書き含む)への参加人数:-(H23)→55人(R3) 累計234人参加
- 聞き書き研修(～H30)を受け入れた地域の名人の人数:累計73人参加
- 里山塾に参加した小学生の人数:48人(R3) 累計394人参加

観光産業との連携

地域資源を活用した観光産業の推進

- 「能登の里山里海」の地域資源を活用した、イベントやツアーなどを実施。

【白米千枚田でのイベント】

「能登の里山里海」を代表する棚田となっている「白米千枚田」では、「あぜのきらめき」や「稲刈りイベント」などが実施され、観光客は着実に増加。



「あぜのきらめき」などのイ
ベ
ントを実施。

農林水産業の振興

農林水産物の付加価値向上と生産振興

- 「能登の里山里海」で磨かれた選りすぐりの食品を、世界農業遺産 未来につなげる「能登の一品」として認定。(令和4年3月現在44品が認定)

認定商品に
はロゴマーク
をつけてPR

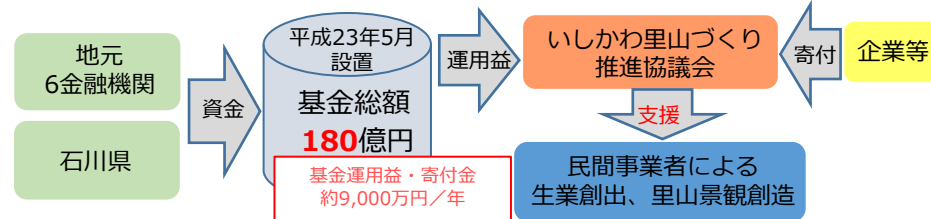


【認定商品販売額】
認定前に比べ
約30%増
(認定商品の平均)
※令和元年度実績



能登大納言小豆 奥能登揚げ浜塩

- 地元企業と連携して、「いしかわ里山振興ファンド」を創設。里山里海の地域資源を活用した商品・サービスの開発等に取り組む地域住民や企業等を支援



- 地元金融機関と連携して、「いしかわ農業参入支援ファンド」を創設し、耕作放棄地の解消を目指す経営体の営農定着のために5年間支援。平成26年7月に設置され、(公財)いしかわ農業総合支援機構が運営。基金総額は200億円。

- 世界農業遺産 未来につなげる「能登の一品」の認定数:-(H23)→44品(R3年度末)
- いしかわ里山振興ファンドの採択件数: 11件(H23)→35件(R3) 累計256件採択
- 世界農業遺産認定後の能登の農業参入企業等の数: 47社(R3年度末)

【世界農業遺産スタディーツアー】

都市部の住民を対象に、平成23年度より、企業とタイアップして「世界農業遺産スタディーツアー」を実施。ツアーの参加者は、世界農業遺産を学び、「能登の里山里海」の多彩な魅力を体験。



「能登の里山
里海」を体験
できるツアーを
開催。

- 世界農業遺産スタディーツアーの開催回数: 2回/年(H23)→2回/年(R3) 累計35回開催
- 世界農業遺産スタディーツアーの参加者数: 55人(H23)→220人(R3) 累計1,204人参加(オンライン開催含む)
- 白米千枚田への来客数: 420,600人/年(H23)→611,250(R1)



茶草場に息づく 生物多様性

毎年秋の草刈りを行う茶草場にはこの地域にしかない固有種や絶滅危惧種が生息する。



カケガワフキバッタ



フジタイゲキ

地域で継続する農業文化



茶手揉み風景



静岡の茶農家は、
ひと手間かけて
良いお茶作りに励んできた。
その営みが、
豊かな生物多様性を守っている。

茶草場農法とは

高品質な茶生産のため、通常の茶栽培に①～④を組み込んだ農法



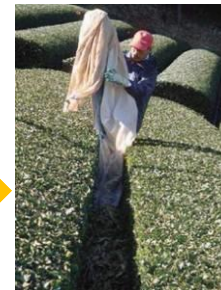
①晩秋に草を刈る



②刈った草を乾燥させる



③乾燥した草を裁断する



④茶園に投入する



世界農業遺産認定後の取組

茶草場農法実践者認定制度

◆「静岡の茶草場農法」実践者認定制度を2013年9月に創設した。この制度では、茶園経営面積に対する茶草場の管理面積に応じ、生物多様性保全貢献度を3段階に区別して農法実践者を認定しており、お茶の葉の数で表している。

茶草場管理面積/茶園経営面積の割合	
認定区分	認定表示
5%未満	なし
5～25%未満	
25～50%未満	
50%以上	

茶園経営面積に対する茶草場の管理面積に応じ、

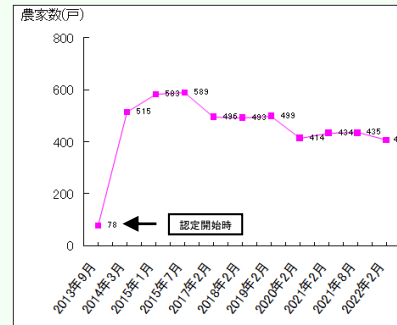
3ランクの認定



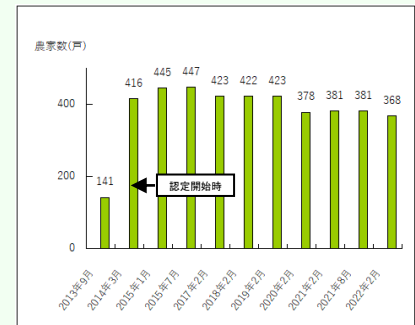
認定実績(2022年3月末時点)
認定戸数 407戸
認定シール累計販売数 636万枚
登録販売業者 152社

◆下のグラフは茶草場農法実践者認定制度を2013年9月に開始してからの実践農業者等の推移を表したものである。制度開始以降、認定を受けた実践農業者及び茶草場面積は以下のとおり。

認定農業者数の推移



認定茶草場面積の推移



応援ロゴマークの作成

◆応募総数304作品から選定したロゴマークを2017年に公表した。茶製品のみならず、幅広い製品に使用することができる。延べ申請件数は31件(2022年3月末時点)



モデルツアーの実施

◆世界農業遺産「静岡の茶草場農法」の維持や認定地域の活性化のため、地域の実情にあった茶草場農法に関するモデルツアーの実施に係る支援を行っている。



公式HP・SNSでの情報発信

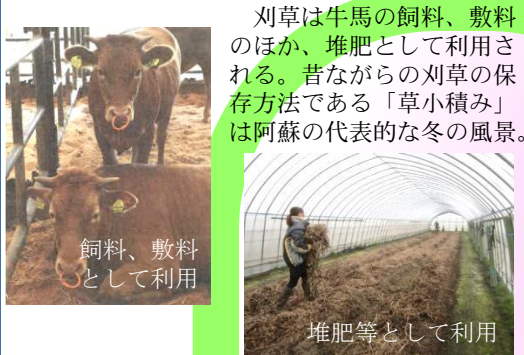
◆公式ホームページ(日本語・英語)を開設し、情報発信力を高めるとともに、SNSの活用による双方向の情報発信を実施している。



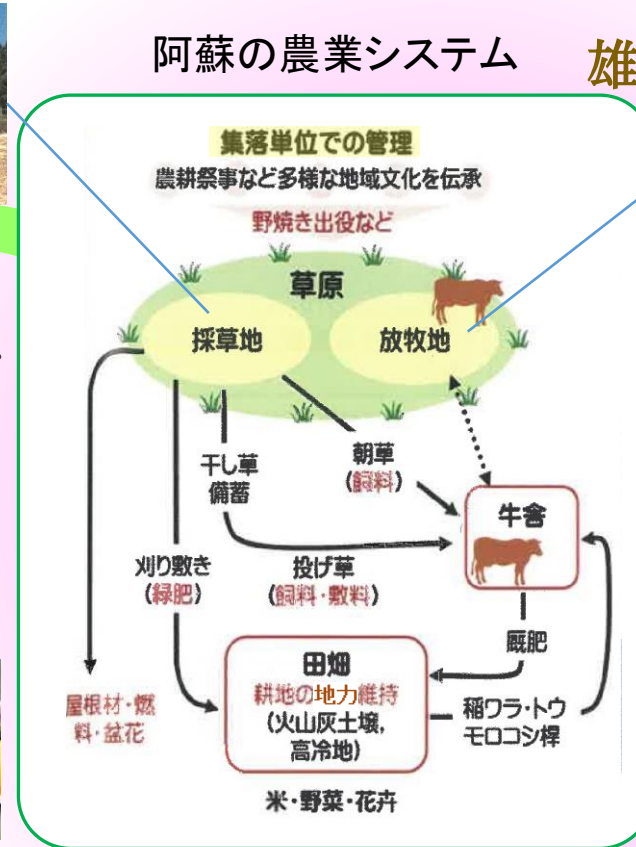
～この他、生物多様性の保全、茶文化の普及等様々な活動に取り組んでいます。～

阿蘇の広大な草原は、野焼き、放牧・採草という農業上の利用により千年もの長い間維持されてきたもので、この営みを通じて地域固有の文化、生物多様性、景観が形成され、今も多様で豊かな資源が守られている。

千年にわたって
草原を受け継いできた
阿蘇の農業。



文化の伝承



雄大な草原の風景



草原の維持管理



野焼きは春を迎える2月後半から4月にかけて行われ、低木を除去し、初夏にはススキなどを再び繁茂させる省力的で効果的な草原管理技術。



独自の生物多様性



豊かな水



世界農業遺産認定後の効果・成果

※R4.8現在

農林畜産業 の振興	✓ 野草堆肥の有用性研究の成果として、野草堆肥への需要が増加 阿蘇草原再生オペレーター組合採草量 442 t (R3) ✓ 地元事業者が取り組む特産の「おぐに黒大豆」を使用したスイーツ開発や、産山村の野花、ハーブ等を用いたアロマセットの制作など、阿蘇の農畜産物を活用した六次産業化の取り組みを支援。 ✓ ニューファーマーズ経営セミナー、農業師匠制度により新規就農者数が増加 ホームページ及びパンフレットにより管内外で周知・PRを実施 阿蘇地域における新規就農者 27名 (R3)	 おぐに黒大豆 ソフトクリーム(左)
草原の保全	✓ 繁殖あか牛導入支援事業、あか牛オーナー制度の推進 熊本県や阿蘇草原再生協議会等と連携し、繁殖あか牛の導入を支援 熊本県 延1,190頭 (H28) →延1,509頭 (R3) 阿蘇草原再生協議会 延332頭 (H28) → 延629頭 (R3) ✓ 周年放牧、広域放牧（阿蘇地域内外からの放牧）の実施 周年放牧の実施取組者・頭数がそれぞれ938頭・69戸 (R2) 広域放牧の実施取組者・頭数がそれぞれ824頭・72戸 (R2) ✓ 野焼きボランティアの派遣、活動費の支援により管理放棄された牧野の野焼きが再開された。 野焼き再開箇所数 1 牧野 (R3)	 あか牛の焼肉
交流の拡大	✓ 阿蘇産農産物 P R 映像の活用や九州管内での販売コーナーの設置のほか、令和 3 年度には地元のひとり親家庭への米袋進呈や、YouTuberによる阿蘇農畜産物の商品紹介を実施するなど、阿蘇地域内外において阿蘇世界農業遺産の認知度向上を図った。 ✓ フットパスコースの設定 (H24 : - →R3 : 14コース) ✓ 会場と阿蘇西小学校、南阿蘇中学校、県立阿蘇中央高校等をオンラインで結び、「令和3年度 こども地域学習発表会」を実施した。 ✓ 九州における世界農業遺産認定地域である 3 地域で「九州農業遺産フェア」を宮崎市で開催し、熊本県・大分県・宮崎県の魅力発信を行った。（新型コロナウイルス感染拡大防止対策のため阿蘇地域は展示のみ） (R3)	 こども地域学習発表会 の様子

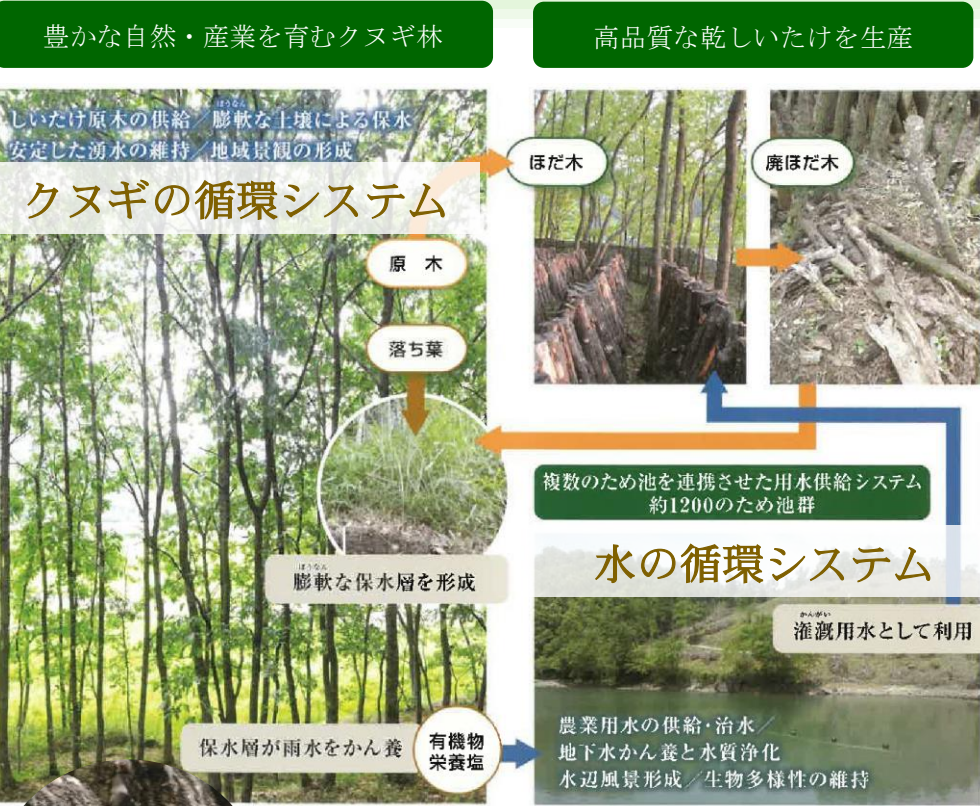


国東半島宇佐地域
世界農業遺産
Kunisaki Peninsula Usa GIAHS

世界農業遺産 Globally Important Agricultural Heritage Systems

クヌギ林とため池がつなぐ 国東半島・宇佐の農林水産循環

しいたけ栽培のほだ木に利用するクヌギは、約15年のサイクルで伐採・萌芽・再生を繰り返し、クヌギ林が維持される。クヌギ林は雨水を蓄え、そこから有機物を含んだ湧水をいくつものため池に溜めて、農業に利用する。



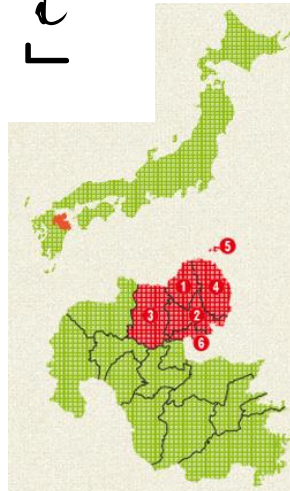
地域内には、15世紀からほとんどそのままの姿で現在に伝わる農村景観もある（左）。シチトウイは、い草より強健で耐久性に優れた畳表の材料で、現在は国東半島地域が国内唯一の産地（右）。

ため池をつないだ用水供給システム



複数のため池をつないで農業用水を供給するシステムは、貴重な水を効率的に利用する雨の少ない半島ならではの知恵から生まれたもの。

「木の恵み
しいたけの故郷
木が食料を生む」



- ① 豊後高田市 ④ 国東市
- ② 杵築市 ⑤ 姫島村
- ③ 宇佐市 ⑥ 日出町



育まれる生物多様性・文化



世界農業遺産認定後の効果・成果

※R4.3現在

次世代への継承

- ・小学校、中学校、高等学校で世界農業遺産に関する学習を実施（認定後延べ25,631人）
 - ・小学校：世界農業遺産を題材とした**教材本（マンガ）**を使用した**授業**を実施
 - ・中学校：農林水産業従事者を講師とした**出前授業**を実施
 - ・高等学校：農業者等に聞き取りを行い記録を残す、「**聞き書き**」を実施



- ✓生まれ育った**地域への理解と誇り**が醸成されている。
- ✓聞き書きに参加した高校生が地元で就農を目指しているなど、農業を担う**次世代の育成**につながっている。



教材本（マンガ）



出前授業の様子



取材をする高校生

地域の元気づくり

<交流人口拡大>

- ・ため池等を巡るウォーキングコースを26箇所整備 → **ウォーキングイベント参加者**:延べ 約21,400人
- ・田植体験等を通じた**地元小学生・大学生との交流**
- ・国内外からの**視察・研修を積極的に受入**



- ✓**地域おこしグループ等**の自主的な活動が年々活発化。
- ✓来訪者が増加、**地域内外の交流機会**が増加している。



田植え体験交流



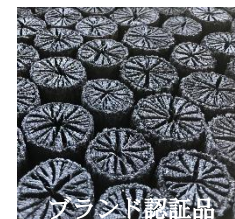
池干し・生き物観察会

<ブランド化>

- ・世界農業遺産地域ブランド認証品を**4品目設定**（乾しいたけ、シチトウ加工品、**米、茶の湯炭**）
- ・シンボルマークを貼付した世界農業遺産**応援商品の拡大**（59企業・団体 269商品）



- ✓**地域製品の販売促進**され、**認知度も向上**



ブランド認証品
「茶の湯炭」



各種応援商品



森を育てる活動

森林の育成と水資源管理



森が蓄える長良川の清流

都市部を流れる川でありながら
日本三大清流と呼ばれる



日本有数の鮎

伝統漁法による食料の確保



川を守る活動

優れた景観と生態系の保全



森・川・海のつながりで育つ鮎

生物多様性と鮎資源の確保



鮎と水の文化

流域に伝わる文化と価値観

長良川では
流域八十六万人のくらしの中で
清流が保たれ、鮎が育ち、
地域の歴史、文化、経済と
深くつながっています。



世界農業遺産認定による効果

農林水産業



「里川」における持続的な農林水産業の振興

- ・「岐阜県魚苗センター」の拡充
- ・人工ふ化放流事業、繁殖環境整備
- ・7月第4日曜日を「GIAHS鮎の日」に制定
- ・「清流長良川の恵みの逸品」の制定
- ・海外トップセールスでのプロモーション
- ・国際基準の水産エコラベルマリン・エコラベル・ジャパンの取得



GIAHS鮎の日

- 産卵場造成面積：800m²(H25)→**1,600m²**(R3)
- 「清流長良川の恵みの逸品」認定商品数：**55商品**(R4. 7)
- 県産鮎輸出量：15kg(H25)→**1,750kg**(R3)

伝統漁法、伝統文化



鮎を対象とした伝統漁法と、

鮎と水にまつわる伝統文化の継承

- ・伝統漁法、文化を守る後継者の育成
- ・「清流長良川あゆパーク」の運営
- ・鶴舟の造船・舟大工育成事業の実施
- ・学校への講師、ガイド派遣

- 体験学習を通じた水産業の振興と世界農業遺産「清流長良川の鮎」の情報発信拠点、清流長良川あゆパークオープン：H30.6.2
- 清流長良川あゆパーク来場者：**62万人**(R4.7月末)



清流長良川あゆパーク



伝統漁法を親子で学ぶ講座

環境の維持、保全



「里川」における水環境、生物多様性の維持、保全

- ・水源の森づくり、魚のための森づくり
- ・良質な水質の保全
- ・生物多様性の維持、保全

- 漁協の「長良川源流の森育成事業」：**127名参加**(R3)
- 魚つき保安林面積：4.5ha(H25)→**13.3ha**(R3)
- 岐阜県自然工法管理士新規認定者数：134人(H25)→**128人**(R3)



魚つき保安林



長良川源流の森育成事業

多様な主体の参画



地域住民や若い世代による取り組みの推進

- ・長良川システムサポーターの育成
- ・プレーヤーズによる活動
- ・高校生による調査研究への支援

- 長良川システムサポーター認定者数：**76名**(R3)
- プレーヤーズ登録団体数：**89団体**(R4.7)
- 高等学校への調査研究の支援：**4校**(R3)



高校生による調査研究成果発表



システムサポーター研修

情報発信



国内外に向けた長良川システムの発信

- ・世界農業遺産体感モデルツアー
- ・国内認定地域との連携PR
- ・「東南アジア漁業開発センター」との協力
- ・「内水面漁業研修センター」開設における研修生受け入れ、研究員派遣による技術指導
- ・国際貢献活動の国内外でのPR

- 体感モデルツアー：**54コース 延べ1,270名参加**(H28～R3)
- アジア、アフリカ地域等からの研修生や政府関係者の視察研修受け入れ：**34カ国156名**(のべ人数)(H28～R3)



体感モデルツアー



内水面漁業研修センターでの研修



南高梅



紀州石神田辺梅林(田辺市)

里山が育み、
人がつなぐ、
日本一の梅づくり



養分に乏しい斜面の梅林周辺に薪炭林を残すことで、水源涵養や崩落を防ぎ、薪炭林を活用した紀州備長炭の生産と、ミツバチを受粉に利用した梅栽培を行っています。



ニホンミツバチによる受粉



世界農業遺産認定による効果

梅・紀州備長炭の生産振興

梅と備長炭を中心とする生業の維持発展

- みなべ町・田辺市で生産される南高梅、紀州備長炭は日本の最高級(トップブランド)
- みなべ町・田辺市の農家の9割以上が梅を栽培し、梅干し等の二次加工業の企業が地域内に集積。製炭も山間部の産業として大きな地位。梅と備長炭に関わる人々の生業が地域全体に広がる。

- 梅栽培面積 : 4,060ha (H22) → 4,180ha (R2)
- 梅新品種普及面積: 81ha (H25) → 164ha (R2)
- 山管理技術講習会参加: 30人 (H25) → 87人 (R1)



観光体験の充実

「みなべ田辺の梅システム」が支える本地域の魅力アップ

- 観梅・梅干工場見学・観光炭焼き体験・伝統行事など観光体験と地域への滞在。システムを説明できる場所・人材を充実

- 観光客数: 1,625,190人 (H25) → 1,676,709人 (R1)
- うめ・炭情報発信施設の来館者: 53,999人/年 (H25) → 61,895人/年 (R1)
- みなべ梅林入場者数: 24,649人 (H28) → 29,711人 (H30)
- 外国人延べ宿泊者数: 38,754人 (H25) → 40,283人 (R1)



将来を見据えた次世代への継承

伝統技術の継承と後継者育成

- 生産者の姿、ランドスケープ、生物多様性、伝統技法、伝統文化などを伝承していくため、学びの機会を広く提供

- 教育機関と連携した梅システムマイスターの養成: 9人 (H29) → 累計43人 (R3)

みなべ・田辺地域を支える人材の確保と育成、多様な主体が参画する仕組みづくりと受入体制の充実

- 教育機関での食育学習会: 48回 (H25) → 264回 (R3)



梅システムの国際的な貢献

世界的な重要性を発信するとともに新たな認定をめざす開発途上国を支援

- 世界農業遺産認定地域や諸外国との連携した情報共有、交流を発展させ本地域の賑わいに

- 海外研修生: 28人 (H28) → 累計89人 (H30)
- 受入国数: 2カ国 (H28) → 累計12カ国 (H30)

- 「みなべ田辺の梅システム」の国内企業や諸外国への情報発信

- ロゴマークを活用する企業数: 18社 (H28) → 累計38社 (R3)
- イベント・プロモーション参加: 4件 (H27) → 10件 (R3)





森林理想郷の
伝統農林業と
文化を未来へ繋ぐ

人々は、森林から食料や木材を得ながら、森林が生み出す水や養分を利用して多彩な農業を営んできた。そこには、先人達の知恵と努力が残した保安全管理の技術があり、営みによって生まれた五穀豊穡を願う祭事文化、固有の生物多様性が今も息づく。



多彩な伝統農林業



国内に唯一残る焼畑、シイタケ栽培、釜炒り茶、森林やその周辺草地の草を餌として育てる和牛など、特徴的な農林業が営まれている。



先人の努力を今に伝える
山腹水路は総延長500kmにおよび、今も1,800haの山間棚田を潤している。



地域の森林保安全管理方法を象徴するモザイク林。針葉樹林、落葉・常緑広葉樹林が、パッチワーク状に山を彩る

伝統文化と地域の絆



五穀豊穡を祈願して奉納される神楽。厳しい自然の中で農林業を営む地域ならではの培われた強い連帯の象徴



山間地農林業複合システム



固有の生物多様性

林間に自生するクマガイソウ。独特の森林保安全管理によって、固有の生物多様性が育まれる。



高千穂町
日之影町
五ヶ瀬町
諸塚村
椎葉村

世界農業遺産認定後の効果・成果

※R4.8現在

交流人口増加	<観光> ✓ 世界農業遺産ツアー商品の造成→体験メニューが「県北クーポン」として商品化 ✓ 観光入込客数の増加に寄与（H28：200万人→R元：237万人） <農泊推進> ✓ 農家民宿数の増（H27:21軒→R3:42軒） ✓ 「農泊 食文化海外発信地域（SAVOR JAPAN）」の認定  
認知度向上	<教育> ✓ 協議会、宮崎大学、高千穂高校の三者による人材育成等に関する連携協定締結 ✓ 世界農業遺産教育プログラム「GIAHSアカデミー」開講 <一般> ✓ 国内外におけるプロモーション活動（R元:17回、R2:19回、R3:18回） - シンポジウム開催等による認知度の向上（県民意識調査による認知度 R3：56%） <地域ブランディング> ✓ GIAHSロゴマーク添付商品販売（R3時点で28商品） ✓ 地域ブランド「五國豊饒」の立ち上げ（2商品）  
地域づくり活動	<新たな取り組みの開始> ✓ 農産物を付録とした情報誌（食べる通信）の発刊 ✓ N P O 法人による生物多様性調査開始（田んぼの生き物調査） ✓ 山腹用水路を活用した小水力発電の整備 ✓ 焼畑の拡大 ✓ ジビエを活用した新商品開発（ジビエソース、鹿肉の燻製等） ✓ 企業との連携（スーパーホテル：諸塚村産材使用、新出光：小水力発電等）  

世界農業遺産

Globally Important Agricultural Heritage Systems

持続可能な水田農業を支える 「大崎耕土」の伝統的水管理システム



大崎耕土が育むランドスケープと伝統文化、継承への取り組み



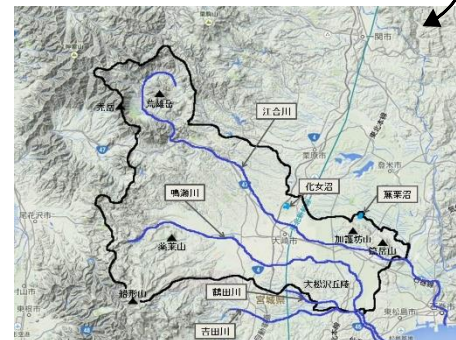
宮城県大崎地域は、東北の太平洋側に特有の冷たく湿った季節風の「やませ」による冷害や地形的要因による洪水や渇水を克服するため、水路やため池などの水管理のシステムが発達しています。厳しい農業条件の中で育まれた豊穡を祈る農耕儀礼などの農文化や、「居久根（いぐね）」と呼ばれる屋敷林などの景観が特徴です。



屋敷林「居久根」



水田が支える農業生物多様性



厳しい自然環境が
洗練された
農業システムを
つくりあげた



世界農業遺産認定による効果（アクションプランの推進状況）

フィールドミュージアム構想

フィールドミュージアムの構築による地域資源の魅力の再発見を通じた動的な保全と活用

→ 多様な資源を巡るツーリズムを核とした交流人口の拡大

「大崎耕土」の地域資源の「見える化」の取組

- ・大崎耕土11地域の地域資源をマップに整理
- ・紹介映像と連動した案内板を地域内40カ所に設置
- ・「食」「体験」に焦点を当てた各種パンフレットの制作

フィールドミュージアムマップ

映像と連動した案内板



たべるフィールドミュージアムマップ

郷土料理のレシピブック

郷土を味わう
レシピブック

↑ ランドスケープ価値の向上に向けた保全手法の検討

- 居久根保全における補助事業を創設
- 大崎耕土語り部養成に向けた公民館事業との連携

世界農業遺産ブランド認証制度

地域資源の価値の発信を通じた持続的農業の推進

→ ブランディングによる価値の共有と向上を通じた持続的農業の推進

- ・認証主体:大崎地域世界農業遺産推進協議会
- ・認証対象:農畜産物及びその加工品

基本項目

- 環境負荷の低減
- 地域内生産
- 銘柄やブランド基準の維持
- 関係法規の遵守
- 生き物モニタリング(米)

選択項目(GIAHS視点)

- 特筆した環境負荷の低減
- 品質の多様性の保全
- 生産工程管理基準
- 多面的機能支払活動実施
- 特筆した生物多様性の取組

R元年度開始（米:R元～、岩出山凍り豆腐:R2～、野菜・日本酒:R3～）

教育機関と連携した人材育成

農業の知恵の継承と価値の共有

→ 人材育成の推進による農業の知恵の継承と価値の共有

公的教育機関(中高等)での出前授業実施

世界農業遺産ツアーの企画

未来を担う子供たちへの人材育成

各種団体での出前講座実施

※「世界農業遺産副読本」の制作(R元)



地域内の代表的な品種「真妻」

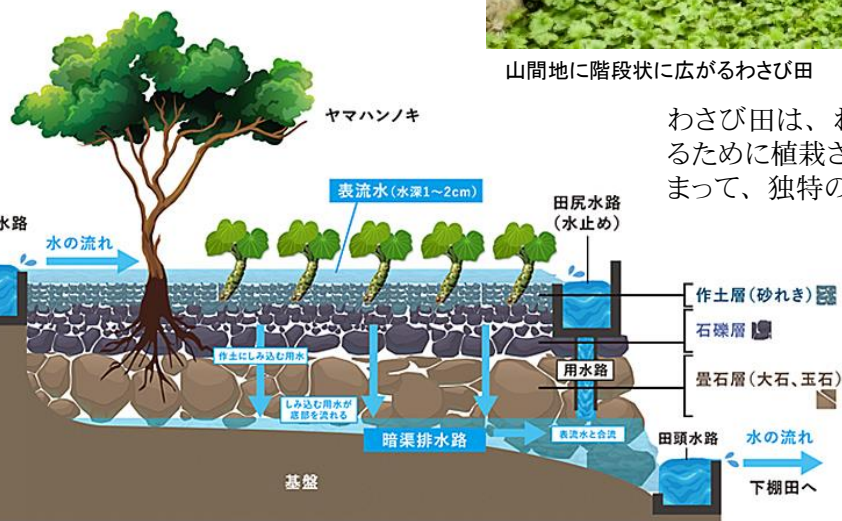
日本の固有種であるわさびを、沢を開墾して階段状に作ったわさび田で、肥料を極力使わず湧水に含まれる養分を利用して栽培する伝統的な農業を継承しています。



山間地に階段状に広がるわさび田

栽培発祥から四百年間、自然環境と調和したわさび栽培が継承されています。

わさび田は、わさびを強い日差しから守るために植栽されたヤマハンノキと相まって、独特の景観を織り成しています。



ハコネサンショウウオ

緩やかな水の流れは、ハコネサンショウウオなどの希少な生物に生息環境を提供しています。



世界農業遺産認定による効果(取組状況)

継 承

わさび苗の安定供給 担い手の確保

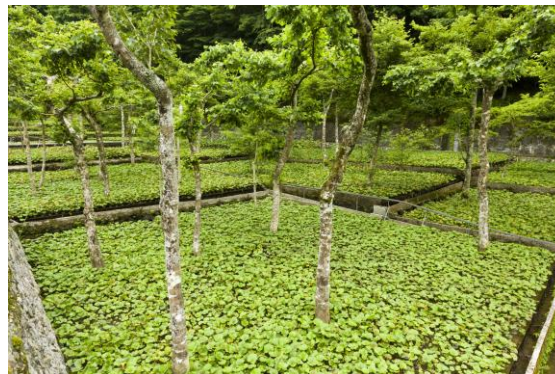
- ・ 県試験研究機関による効率的な苗生産技術の開発、実証普及
- ・ 若手生産者に対する築田技術研修会の開催
- ・ 地元小学校と連携した収穫体験等校外学習の実施
- ・ 地元小中学生向け教材の制作
- ・ 学校栄養教諭等を対象とした講習会の開催



保 全

生産と景観の両立 地域の保全意識醸成

- ・ 景観に配慮した生産資材の検討
- ・ 地域ボランティア団体による森林整備活動
- ・ 専門家による生物多様性調査の実施
- ・ 地元農業高校生に対する生物多様性ワークショップ開催



連 携

企業等との連携 本県産わさびの認知度向上

- ・ 協議会ロゴマークの制作
- ・ 「静岡水わさびの逸品」認定制度の創設
- ・ 地元観光事業者やジオガイド等と連携したわさびのP R
- ・ 協議会H Pによる情報発信
- ・ 市場関係者への農業遺産P R
- ・ 他認定地域と連携したイベント出展



世界農業遺産 にし阿波の傾斜地農耕システム

Globally Important Agricultural Heritage Systems



傾斜地で栽培される蕎麦

四国中央部の「にし阿波」(徳島県西部の山間部)では、段々畑のような水平面を形成せずに**傾斜地のまま農耕**し、敷き草(カヤ)を畑にすき込むことで土の流出を最小限に抑え、雑穀や伝統野菜、山菜、果樹を栽培してきました。

山で営む農業は
語り尽くせないほどの
味わいがある



古民家宿泊施設

ツチアゲの様子



鍛冶による伝統農具製作の様子



そばを粉にせず、実のままで食べる郷土食「そば米雑炊」



にし阿波：徳島県西部圏域の美馬市、三好市、つるぎ町及び東みよし町の2市2町からなる地域です。

日本の原風景ともいえる山村景観、食文化、農耕にまつわる伝統行事などが継承されています。

最近では、農業体験交流を推進し、観光客が多く訪れます。

世界農業遺産認定による効果

農林水産業

農林水産物の付加価値向上と消費拡大



- ・「にし阿波の傾斜地農耕システム」を効果的にPRするためのロゴマークの作成
- ・認証制度を創設し、傾斜地集落で栽培された農産物やその加工品にロゴマークを付けてブランド化を推進
- ・にし阿波地域の傾斜地農業の代表作物である「雑穀」と「ごうしいも」の増産プロジェクトチームの創設や秋植え実証圃の設置
- ・管内道の駅で地域特産物の販売促進。毎年、認定記念イベントを開催
- ・ネット販売と6次産業化へ向けたアドバイザー支援事業を実施

文化

伝統農法の継承

- ・にし阿波管内の農業遺産の認知度を高めるため、システムを学び、体感できるスタディーツアーを開催
- ・教育用資料として、教育読本やマンガを作成し地元小学校や中学校での出前授業を実施。農業者団体を対象にシステムの理解を深めるシンポジウムや勉強会を開催
- ・にし阿波の「食」と「農」に卓越した知識・技能等を有する人を「にし阿波・食と農の名人」として認定。担い手の育成と名人技の情報発信を行う
- ・野鍛冶を地元高校生が体験。継承としては、地元の金属加工企業が技術の習得や技術を応用した活用方法などを調査研究する事業を実施。



観光

日本の原風景を体感する交流人口の増加



- ・持続可能な山の暮らしや文化に親和性の高い人に対し、効果的にアプローチできる「メディア」を選抜したツアーを実施。プレスから当該エリアの魅力、そのみせ方・手法を調査し、今後の広報戦略に活用
- ・海外からの更なる観光客の来訪及び滞在日数の増加を図り、3日から7日間程度滞在できる、滞在コンテンツの造成
- ・農泊施設を対象に、インバウンド対応研修、Webマーケティング研修などを実施し、受入体制の向上を図った

集落の維持、保全

多様な主体の参画による集落の保全

- ・多様な国の人材を受け入れる合宿型ボランティア活動である国際ワークキャンプを開催。数週間集落に滞在し、保全活動を実施
- ・企業研修や学生フィールドワークの受入れを行い協働での集落の保全



システムの世界への貢献

- ・インド国ミゾラム州からの視察受入れ。ミゾラム州では35度を超える傾斜地が多く、焼畑農業の生産が低下しているため、当地の技術を学び安定的な食糧供給を図ることを目的に実施
- ・香港漁農自然護理署の視察受入れ